

## 詩人鄭敏的印象

佐藤 普美子

我的寂寞是一条長蛇，／冰冷地没有言語——／……  
……／它是我忠誠的同伴，／……

(馮至，「蛇」1926)

……／但是、有一天当我正感觉／“寂寞”它噬我的心像一条蛇／  
忽然，我悟道：／我是和一個／最忠實的伴侶在一起，／……

(鄭敏，「寂寞」1944)

近年、四十年代新詩の中の〈九葉派〉とよばれる詩人たちについて、その新詩発展に果たした役割と成果を掘り起こそうとする研究が積極的に行われるようになってきた。鄭敏(1920年生)もそれらの詩人の一人である。彼女はその後約三十年間の沈黙を経て、文革終息後の七十年代末に詩作を再開し、八十年代半ばの『心像』組詩等でなお衰えぬ創作欲を示した。きわめて息の長い詩人といえよう。九十年代以降は特に評論の分野で、デリダの〈脱構築〉の考察に依拠しつつ五四以来の白話を再検討する熱のこもった議論<sup>1</sup>を展開し、英米文学研究者としての本領を発揮している。詩人としても学者としてもまさしく「攀登不息」<sup>2</sup>と形容するのがふさわしい一人だろう。

鄭敏は四十年代初、昆明の西南聯合大学哲学系に学んでいるが、当時同大学でドイツ語・ドイツ文学を教えていた詩人馮至の影響のもとに詩作を開始した。『詩集1942-1947』に収められた作品には、時に哲理に走る嫌があるものの、総じてみずみずしくのびやかな感覚が滲み出たものが多い。しばしば師である馮至の(特にソネットの)作風に通じる観照的表現が見られるほか、冒頭に掲げたように明らかに彼の(二十年代の)詩句をふまえた作品もある。初期作品中、特に印象的なのは「濯足」「詩人和孩童」等のように、生命力が肉体を通過して外界に弥漫していくような若々しい詩篇である。八十年代の創作にも、静かな情熱が形を変えて成熟していることが感じられるが、それらの生命感の基底には生に対する向日性の思弁が一貫してあるように思われる。これが私の鄭敏の詩歌に対する印象であった。

その鄭敏に、昨年八月北京で会うことができた。清華大学中文系の藍棣之、王中

忱両氏の案内により、清華大学構内にある鄭敏の自宅を、日本からは釜屋修氏、渡辺新一氏、松浦恒雄氏、私、そして当時北京大学で研修中の近藤龍哉氏とともに訪問した。私自身に限っていえば、質問内容の準備不足、聞き取り能力の欠如と初対面の緊張感、そして鄭敏のあまりにもなめらかでよどみのない話しぶりにただただ圧倒されるばかりで、一時間半余りのやりとりをまともに記録することもできずにおわった。鄭敏の九葉派についてのまとまった発言及び五四以来の〈文化激進主義〉からくる文言／白話、書面語／口語といった二項対立観を脱した「漢語」の本質の再検討を訴える見解は、その席で鄭敏からいただいた「遮蔽与差異——答偉明先生的十二問」(『詩』双月刊NO. 33 1997. 3. 1香港)の詳しいインタビューに整理されている。また『漢字文化』(1997-1・2)等の雑誌にも、西欧の形而上学を支配してきた音声中心主義＝ロゴセントリズムの一元中心化を脱構築するデリダの〈エクリチュール〉に示唆された言語観を展開している。具体的には例えば漢字という文字のもつ豊かな潜在情報に敏感であるべきことなども説いている。(因みにデリダの〈エクリチュール〉は決して書記言語の優位を意味しているのではないが。)鄭敏その人の印象については、以前他の所に書いたので、その一節をそのままここに紹介することにした。

……………さて、我々の前に現れた鄭敏は白地に小さめの幾何学模様を散らしたノースリーブのワンピース姿。黒い石のネックレスと黒いストッキングもかえって涼しげだ。小柄で、髪を上にとりまとめ、額で切り揃えた前髪は黒々としている。七十代後半とは思えないほどおしゃれでキュートな風貌。人なつこい笑顔で紅茶とクッキーを勧めてくれる。質問に対しては、手振りを交えた生き生きとした語り口の、質問量をはるかに凌ぐ量の答えが返ってくる。たった一度だけ言葉少なになったのは、同席した藍棣之氏が心臓強く(!)彼女の師である馮至への感情を尋ねた時。「愛情にもいろいろあるわけで……」と少し恥ずかしそうにためらいがちに言葉を選んでいった彼女だが、膝に置かれた手の中のハンカチは幾度となく揉みしだかれていた。それにしても、鄭敏という人間の細胞の一つ一つ、特に脳細胞が〈時〉の浸蝕を免れてかくもつやつやと輝いているのはなぜだろう。……………(『お茶の水女子大学中国文学会報』第17号「交流」欄1998年4月)

初対面の印象はとにかくエネルギーで才気煥発(彼女の評論の語気そのまま)、しかもどこか少女のような愛らしさを残す風貌。彼女自身が「第二の童年」(組詩「第

二的童年与海」1982の表現)に突入しているからかもしれない。ともかく彼女の活力そのものが人にある種の喜びを与えてくれる、そういう雰囲気にも包まれた人であった。

四十年代、昆明で彼女が馮至の学生だった頃もこんなふうに快活で雄弁だったのだろうか。そういえば、この翌日、建国門外永安南里にある馮姚平女史(馮至の長女)のお宅を訪問した際、馮女史が昆明での思い出を聞かせてくれた。ちょうど昆明で書かれた馮至の『十四行集』初版を見せていただいていた時だったと思う。当時は夜になると教師と学生が集まって文学について語りあい、詩を朗読しあう習慣があったが、そういう時、馮至はまだ四～五歳だった姚平を必ずその場へ連れて行ったという。だが彼女の方は退屈なのでいたづらをしては飛んだり跳ねたりしていたらしい。その席には鄭敏もいたというから、彼女と鄭敏とは五十余年来の知りあいということになるはずだ。馮至はよく「物質的に最も貧しく、精神的に最も豊かな」この時期のことを懐かしそうに回想する。粗末な造りのたいした調度も道具もない薄暗い部屋で、小さな子供が気ままに走り回り、笑い声や話し声がさざめく様子は文学的サロンなどということばのイメージからはほど遠いものだったであろう。けれども、そうした様ざまな人間の声が互いの心に響きあう、時に心にしみわたる語らいの場から、鄭敏のような詩人が育ってきたのは事実である。

それから五十年たった今でも、文学の世界に向かって勇敢に誠実に発言し続けることはそう容易なことではない。その詩精神とでもよぶべきものは、やはり四十年代の昆明で、じっくりと培われていたのではないだろうか。

鄭敏訪問の前日、藍棣之氏と彼女の詩歌について少し話をした。もちろん藍氏は鄭敏を大いに評価しているのだが、九葉派のもう一人の女性詩人陳敬容(1917-89)と比べた時、彼女の方が鄭敏より人生で苦労している分、「寂寞」の度合いも深いという意味のことをいわれた。鄭敏は哲学系出身の知性派で詩が観念的になりやすいということだろうか。一方の陳敬容の作品には、確かに人生の辛酸を嘗めてきた実感が強く現れるものも多い。だが一面かえって詠嘆の型にはまり、既存の言葉で世界を解釈してしまう所があるのも事実だ。その点、抽象的思考を根底に据え、具体的形象を通して感覚を喚起する鄭敏の言葉の力が、あるリアリティをもって未知の世界を開示してくれることもあるのではないだろうか。(と、心の中で少し反論する。)

一九八三年夏、初めて馮至のお宅を訪問した時のこと。氏がある書物に言及した折、私が少しでもピンとこない顔をすると、その都度氏はさっと立ち上がり該当する本を書棚から取り出して見せてくださった。当時七十七歳の氏の年齢と体格に不似合いなほど素早いその動作に驚いたものである。今回、鄭敏との談話の最中、勸

められたクッキーを私が一口かじったその時、崩れやすい柔らかなお菓子の生地が私の服にこぼれるのを心配した鄭敏はさっと立ち上がり、部屋の外へ出てわざわざティッシュを取って来てくださった。もうすぐ八十歳になろうという人のものとは思えぬその素早い身のこなしは十四年前の馮至を思い出させた。寡黙な馮至とやや饒舌な鄭敏。この一見対照的な両者の間に、受け継がれていった〈詩のこころ〉とはどんなものなのだろう。訪問客への気配りにすぎない、こんなとっさのささやかな所作にも、両者がリルケから学んだ、対象をじっと「観る」という認識方法が現れているのではないか、などと大仰なことまで考えてしまい、鄭敏の身体を通して、様ざまな思いが時空を超えて広がっていく、楽しい時間だった。

最後に、鄭敏八十年代創作の転機となった<sup>1)</sup>といわれる作品『心像』組詩の中的一篇「渴望：一只雄獅」を掲げる。心の中の「獅子」を観る鄭敏の眼。従来の「獅子吼」とは別の新たな意味を賦与するのではないだろうか。

在我的身体裏有一張張得大大的嘴  
它像一只吼叫的雄獅  
它衝到大江的橋頭  
看着橋下的湍流  
那靜靜滑過橋洞的輪船  
它聽見時代在吼叫  
好像森林裏象在吼叫

它回頭看着我  
又走回我身体的籠子裏  
那獅子的金毛像日光  
那象的吼聲像鼓鳴  
開花樣的活力回到我的体内  
獅子帶我去橋頭  
那裏，我去赴一個約會

---

<sup>1)</sup> 鄭敏の主だった論文を以下に挙げておく。

①「漢字与解構閱讀」(『文芸争鳴』1992-2、『漢字文化』1997-1轉載)

②「世紀末的回顧：漢語語言變革与中国新詩創作」(『文学評論』1993-3)

③「關於《如何評價“五四”白話文運動》商榷之商榷」(『文学評論』1994-2)

- 
- ④「中国詩歌の古典与現代」(『文学評論』1995-6)
- ⑤「20世紀圍繞語言之争：結構与解構」(『詩探索』1996-1、『漢字文化』1997-2轉載)
- ⑥「語言觀念必須革新」(『文学評論』1996-4)
- ⑦「一場關係到21世紀中華文化發展的討論：如何評價漢語及漢字的價值」(『詩探索』1996-4)
- ⑧「余波鄰鄰——“‘字思維’与中国現代詩学研討会”的追思」(『詩探索』1997-1)  
鄭敏の議論②に対する反論にはじまる関連論文に以下のものがある。
- ①范欽林「如何評價“五四”白話文運動——与鄭敏先生商榷」(『文学評論』1994-2)
- ②張頤武「重估“現代性”与漢語書面語論争——一個九十年代文学的新命題」(『文学評論』1994-4)
- ③許明「文化激進主義歷史維度——從鄭敏、范欽林的争論說開去」(『文学評論』1994-4)
- ④孫乃修「關於文学的傳統与現代化問題的思考」(『文学評論』1994-5)
- ❖ 孫玉石「鄭敏：攀登不息的詩人」(『当代作家評論』1992-5)の語。
- ❖ 藍棣之「鄭敏：從現代到後現代」(『当代作家評論』1992-5)の語。
- 

## 中国现代文学馆工程结构封顶

本报讯 令世人瞩目、文学界翘首企盼的跨世纪项目——中国现代文学馆工程已经顺利完成了结构施工,并于6月26日在喜庆、热烈的军乐声中正式封顶。

中国现代文学馆是由我国当代文学泰斗巴金倡议而兴建的国家级文学馆,它是集文学图书馆、档案馆、博物馆以及文学研究、文学交流于一体的具有民族风格的园林式建筑群。承担这项艰巨任务的解放军总后勤部工程总队深感意义深远、责任重大,全体干部职工以高度的政治责任感和严谨科学的工作作风,克服了工程形体复杂、多折角、多斜交、多圆弧、多吊板、没有标准楼层等诸多困难,顺利完成了复杂的结构施工,不到100天就实现了结构封顶。

国家建设部、中国人民解放军总后勤部、中国作协有关领导出席

封顶仪式。解放军总后勤部工程总队总队长于敦才介绍了工程进展情况。中国作协党组书记翟泰丰发表讲话,他首先感谢全体施工人员的辛勤劳动,并对下一步更为艰巨的施工任务提出要求:各部门

要通力合作、密切配合,进一步搞好装修、装饰、雕塑的精心设计,精心施工。要仔细筹划,精心布展,如期把一座展示中国现当代文学辉煌历程的文学殿堂建设好,向建国50周年纪念大典献礼。

文芸報 1998.6.30